

# 浦島伝説

令和7年1月24日

第32号



鎌倉時代、親鸞聖人と尊称されたお坊さんがいました。浄土真宗の宗祖として知られています。

親鸞が九歳の時、出家する（仏門に入る）決心をされ、慈円という高名なお坊さんのお寺を訪ねました。しかし、すでに夜だったので、「明日の朝、またいらっしゃい。」と言われました。しかし、親鸞は「明日まで待てません」とこたえ、その時詠まれた歌が伝わっています。



あす おも ころ あだざくら よわ あらし ぶ  
**明日ありと 思う心の仇桜 夜半に嵐の 吹かぬものか**

この歌は「今美しく咲いている桜を、明日も見ることができらるうと安心してると、夜半に強い風が吹いて散ってしまいかもしれない」という意味です。それを「明日、自分の命があるかどうか分からない、今日という日を大事にして今やるべきことを精一杯やりとげたい。少しでも早くに仏門に触れたい。」という願いとして表したのです。



慈円（天台宗の僧）  
 愚管抄を著したことで有名

人生において、「明日でいい」といってしまい、その機会を逃してしまうことがあります。わずか九歳の子供が巧みな和歌を作ったことにも驚きますが、その決意や覚悟にも驚かされます。



親鸞（鎌倉時代の仏教家）

また、この和歌からは「命のはかなさ」や「予期せぬ出来事」を感じます。そして「変わらぬもののありがたさ」、「変化への対応」も考えさせられます。

同時に自分自身を振り返るきっかけにもなります。みなさんは「明日やればいい」と言って、先延ばしにしていることはないでしょうか？「もう少し落ち着いたら、新しいことを考えよう」「もう少し落ち着いたら、改善に取り掛かろう」「もう少し落ち着いたら、試験勉強を始めよう」と言って先延ばしし、結局なにも手をつけられなかった経験はありませんか？